

5 レタスピシウム萎凋病の発生

はじめに

兵庫県淡路島のレタス産地において薬剤試験を行っていたほ場で、髓部の褐変症状、萎れを起こす株の中から新たな病害が見つかったので紹介する。

成果

本症状の株は10月定植、1月収穫の作型の2ほ場で収穫期に採取した。萎凋症状が見られ、株を切断すると導管及び髓部が褐変し、株によっては中肋まで褐変していた(図1)。発病株は結球が不十分で収穫できず、軽く巻いたものでも切り口が強く褐変するため出荷できなくなっていた。

褐変した病患部を切り取り、表面殺菌後、分離を試みたところ、*Pythium* 属菌が分離された。分離した菌を再度培養し、無病のレタス苗に無傷接種したところ、レタス苗に萎凋、導管の褐変が再現された。また、病徴が再現された部位からは接種菌と同一の菌が再分離されたため、この *Pythium* 属菌に病原性があることが確認された。

この分離菌の形態観察、菌糸生育温度、DNA-ITS 領域配列の解析などにより、*Pythium uncinulatum* Plaats-Niterink & Blok と同定した。

本菌の菌糸生育温度範囲は5~27℃で、明確な生育適温のピークは見られず、5℃でも旺盛な菌糸伸張があることから、低温期にも発生する可能性が高い。

Pythium uncinulatum によるレタス病害の発生はオランダ、アメリカでは報告されているが国内では未報告である。本病害をレタスピシウム萎凋病として日本植物病理学会に提案中である。

同じく髓部褐変症状、萎れを起こす病害にはレタスバーティシリウム萎凋病、レタス疫病があるが、これらの病害と本病を症状で判別をすることは困難である。病患部を検鏡して棘状突起を持った蔵卵器(図2)を形成していれば区別は可能であるが、同じ株に併発する可能性も高い。

今後の方針

現時点では髓部の褐変症状、萎れを起こす他の2病害に比べ、発生頻度はかなり低いと考えられるが、今後の発生動向を確認する必要がある。薬剤防除などの対策の検討も必要である。

松浦 克成(農業技セ・病害虫防除部)

(問い合わせ先 電話:0790-47-2448)



図1 髓部の褐変症状

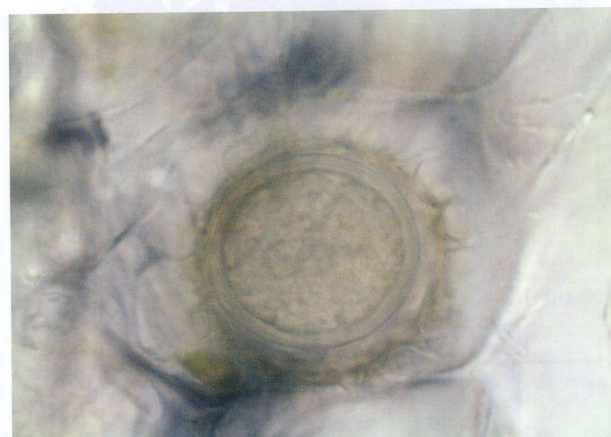


図2 再接種した株の葉柄組織内の蔵卵器